

荻江 八島

能楽の「八島」を題材にした地歌の「八島」を荻江節に変更した曲で、西国を行脚する僧が八島（屋島）に来かかり、一夜の宿を頼むと源義経の亡霊が現れ源平合戦の模様を語ります。

「船戦は昔のことだが、海も山も震動するほどであった。船からはときのこえが、陸には盾が波のように並び、月光で刀は光り、潮には兜の鉾が星のように映っている。刀を打ち合い刺し違えるほどの激しい船戦であったが、夜が明けるにつれ、敵と見えていたのは群れたカモメであり、鬨の声と想ったのは高松の浦風であった・・・」と。

釣りのいとまも波の上 霞み渡りて沖行くや
海士の小舟のほのぼのと 見えてぞ残る夕暮れに
潮風さえものどかにて しかも今宵は照りもせず
曇りもやらぬ春の夜の 朧月夜にしくものはなし
西行法師のなげけとて 月やはものを思はする
闇は忍ぶによかよか うななぜ出たぞ 来ぞ来ぞ曇れ
又修羅道の鬨の声 矢叫びの音震動して
今日の修羅の敵は誰そ 何、能登守範経とや

あらものものしや手なみは知りぬ 思いぞ出づる壇ノ浦の

その船いくさ 今は早や 闇浮に 帰る生き死にの海山

一同に震動して 船よりは関の声 陸には浪の盾

月に白むは剣の光 潮に映るは兜の星の蔭

水や空、空、行くもまた雲の浪の

打ち合い刺し違うる船戦のかけひき

浮き沈むとせし程に、又、春の夜の波より明けて

敵と見えしは群れいるカモメ 関の声と聞こえしは浦風なりけり高松の

浦風なりけり高松の 朝嵐とぞなりける